
スイート ダーリン

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイートダーリン

【Nコード】

N1875Q

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

sweetシリーズ第一弾。

工藤真雪は女性特有の事情で何度も振られていて、もう一生涯結婚しないと決心していた。

しかし、それは一人の男性により覆される。上司×部下

フォレストノベル、自サイトブログよりの転載

「工藤さん…明日は休みだな」

ひたすら涙を流す部下を見て、営業一課課長の神崎景吾は、その部下が明日にでも3日間の休みをとることを脳内のスケジュールに組み込んだ。

「いつものことながら、ご迷惑をおかけします」

部下の名前を工藤真雪と言う。

営業一課で有能な人物として有名ではあるが、さらに別の理由でも有名な人物である。

その理由は月に1日だけ涙が止まらなくなるという、おかしい体質を持ったためだった。

「生理現象だ。しかたないさ」

「すみません」

入社して2ヶ月は月経が来ても勤めていたのだが、いかんせん、元が色白と言っても、色白では説明出来ない程の貧血と痛みでのあまりの真っ青っぷりと、生理前日の号泣に、生理休暇を取れと目の前の当時係長だった現課長に言われたのが始まりだった。

机に戻り、涙を流しながらもパソコンに向かい鬼のような早さで入力をしていく真雪。

終業時間が後5分で終わると言う時間になり、真雪は泣きながらも

熱中していた画面から目を離し、メール送信ボタンをクリックすると神崎の下へと向かった。

「課長。一週間後のK社のプレゼンの詳細をメールしました。いつも通り限りなく引き継ぎのないようにはなっていますが、緊急性のある用件がありましたら。電話を下さい」

「ああ。わかった。ゆっくり休んでくれ」

真雪は一礼すると自分の机に戻ろうとしたが、下腹部が捻れているのではないかと思える程の激痛に襲われ、その場に蹲る。

真雪の激痛に顔を蒼白にさせているのを見て、景吾は痛み止めのありかを真雪に尋ねた。

「相変わらず痛そうだな。痛み止めはどこにある」

「つくえの、した、の、かば、んを…」

息も絶え絶えな様子で話す真雪から離れた景吾は真雪の鞆を取りに行く。

「工藤さんアレですか？」

「男の俺にはわからないが、いつも大変そうだ」

「まだうちは神崎課長の理解があるからいいんですけど、上司に理解がないと大変みたいですよ」

「生理休暇なんてあってもないようなものですから」と言いながら、

真雪の隣席の後輩の志村香苗が真雪の鞆を机の下から出すと、自分の机の上にある未開封のミネラルウォーターを景吾に渡す。

「ありがとう。俺だって工藤さんが下に居なければ、考えたこともなかったよ」

部下に礼を言い、真雪の下へと戻る。

「ほら」

鞆を手渡された真雪は中をまさぐり、痛み止めを出すと、適粒飲み込んだ。

「志村さんがくれた」

そういうと景吾は真雪にミネラルウォーターを渡す。

それで口に含んだ錠剤を流し込むのを確認した景吾は真雪を席まで連れていく。

「薬が効くまで休んでいなさい」

景吾は自分の席に戻った。

「真雪さん。本当に酷いですね。炎症もないのになんででしょう」

香苗が言えば、薬が効いてきたのか、真雪は深く息を吐いた。

「家系なの。出産する迄続くんですって。してからも多少痛みが和らぐぐらいで基本的には痛いままみただけ」

「うわあゝ、大変ですね。予定はありますか？」

結婚する予定はあるのかと言う。そんなものがあつたら、とっとと結婚している。

「あつたらいいね」

真雪が苦笑すれば、香苗は「そうですね。」と語尾を伸ばしてうなずいた。

「この体質のせいで、いつつも振られるの…まあ、いつかは終わるものだし、結婚できなければ、後30年の我慢だから…」

30年の我慢だから。

そんな呟きが真雪から漏れたのを景吾は聞き逃していなかった。

そこに就業時間が終わったことを報せるチャイムになる。

真雪はのそりと立ち上がると、先に上がると香苗に声をかけて、鞆を持った。

その時だった。ふらりと大きく身体が揺れて、机に手をつく。後ろから声をかけられた。

「送っていく。それじゃあ電車は無理だろう。」

景吾だった。

以前、腹痛を抱え、満員電車で揺られている真雪を見かけたらしく、それ以来、会社でこうなると、家に帰るまで面倒を見てくれるようになったのだった。

真雪がどうしてここまで親切にしてくれるのかと尋ねたら、苦しむ部下が目の前に居たら、助けるのは当然だろうと言って笑っていた。その様子に真雪の心は少しだけキュンとなった。

しかし、真雪はこれ以上の発展は期待してはいけない、今後一切、景吾に淡い思いは抱かない。と、頑ななまでに景吾をただの上司とするように心がけていたのだった。

神崎景吾は社会人として、誰にでも優しい。

若くして課長になるだけの実力もある上、背が高く、10人の女性が10人、全員がイケメンだとするだけの顔立ち、そして職場の上司。

それだけに真雪としては恋愛相手としては回避したい。

学生時代から合わせて4人に同じ理由で振られていると、尚更に恋愛が億劫になるのだ。

「課長、ありがとうございます。ですが、1人で大丈夫ですよ」

「…そうか…だが、無理しないように。今から帰宅ラッシュの時間帯だからな」

青白な顔をしつつも、真雪の比較的しつかりした口調に、景吾は頷いくと、少しだけ思案顔をしてから、自分の席に戻り、今日やるべき仕事の残りを片付け始めた。

送ってもらわなければならない。

会社と自宅の乗換駅まで着いたのはいいのだが、電車の混み具合に辟易してベンチに座り込んだ。

もう少し、空いてくるまで待ってみようか。

タクシーでも帰れるだけ財布に入っではいるが、今日は真雪がこの駅についた後から雨が降り出して、タクシーはすぐに拾えそうもなかった。

「工藤さん。…帰れなかったんだな」

「えっ？あつ…神崎課長…」

真雪はただぼーっとベンチに座り込んでいた。
そこに仕事を終えた景吾がやってきた。

「もう7時半だ。退社してから、ずっとここに居たみたいだな。…立てるか？」

「……………無理みたいです」

一瞬、機嫌が悪そうな表情を見せた景吾は、真雪を送ることを決意し、問いかけてみた。

真雪はそんなにも時間が経っていたとはと、一呼吸置き、立ち上がろうとしたのだが、下腹部に何かが突き刺さったように痛みが走り、もう一度ベンチに座り込み、横に首を振る。

「…工藤さん、失礼するよ」

そう言うと、景吾は真雪に近寄り、真雪を抱き上げる。
周囲の視線が集まり、真雪は全身を赤く染める。

「えっ…あの…」

「いつまでもここに居るわけには行かないだろう」

「でも…」

「出来れば、セクハラだとは思わないで欲しい」

口調は軽めで冗談混じりだが、真剣な眼差しの景吾に、これ以上何を言っても無駄だろうことを悟り、真雪は自分に集中する視線から逃れる様に景吾の胸に顔を埋めた。
その様子を見て、景吾は目を細めた。

「電車は無理そうだから、タクシーに乗る。パスは？」

「鞆から釣り下がってます」

「分かった」

駅を出る時に駅員さんに手伝ってもらい、二人は駅を出る。
そして、タイミングよく来たタクシーに二人は乗り込んだ。

「道は分かるから、少しでも休みなさい」

自分の膝に頭を置かせ、真雪を横にする景吾に、真雪は硬直、赤面

していたのだが、人肌の温もりは予想以上の安堵感と睡眠欲を沸き立たせる。

真雪の目蓋は自然と閉じられていた。

どこ？

真雪が目を覚ますと、見知らぬ天井が目に入る。
カーテンの隙間から見える明るい空。

「まさか……つつ……」

飛び起きた途端に悪夢の2日目の生理痛に襲われた。
身体を丸めて、耐える。

「くすりい……やあ……」

か細い声が漏れる。

「起きたようだな。薬飲むか？」
水入ったのコップを片手に入ってきたスーツ姿の景吾に真雪の目は
見開かれる。

「あまりに熟睡していて、起こすのに忍びなくてな。何も悪さはしてないからな」

いたずらっ子の笑みを浮かべて、両手を上げて、何もしていないと

言っていた通り、多少の着崩れはあるものの、真雪の姿は昨日のままのスーツ姿だった。

「ただの部下にこれ以上は本当のセクハラだからな。まあ、人によつては既にセクハラかもしれない。それと、すまないが、スーツはクリーニングに出してくれ」

景吾は水をサイドボードに置くと鞆を渡す。

真雪は痛みに動きが緩慢になるが、鞆から痛み止めを出した。

しかしタイミングよく痛みのピークが来るもので、お腹に手をあて身体を丸める。

「何錠だ。」

「に……」

景吾は放り出された痛み止めを取り出すと、真雪の口に含ませる。サイドボードからコップを取り、真雪の身体を起こして支える。

「飲めるか？」

景吾は歯を食い縛る真雪の肩を抱きしめ、口元にコップを寄せた。

真雪が一口水を飲むのを確認すると、コップを置き、ゆっくり真雪をベッドに横たえる。

腰を擦られ、　なんで、こんなにやさしいの　疑問と痛みの中で真雪は安心感に再び意識を失った。

何で課長が…

真雪は自分を覗きこんでいる相貌に驚いた。

そう言えば…っー

「今は１８時を過ぎたぐらいだ。良く寝ていたようだけど、痛そうだな」

シャワー後のラフな姿に眼鏡をかけた会社とは違う景吾に真雪は胸を高鳴らせた。

いつも真剣に書類を見ている目は優しげに自分を見ていて、これはマズイと真雪は視線を外す。

「すみ…ませ…ん」

「気にするな。薬を飲むか？」

「…はい…」

真雪がジクジクと痛む身体を何とか起き上がらせると、景吾は背中にクツションをあてがった。

「その前にこれ飲むか？空腹に薬ばかりだと身体に悪い」

真雪の目の前に差し出されたのはホットミルクだった。

カップを受け取り、ふうふうと息を吹き掛け、一口飲む。

暖かさと甘味に身体が少し楽になった気がした。

こんなにも安らかなのは久しぶりだろうか。

親元を離れてからは、生理の度に痛みに動けず、薬も飲めれば幸いなもので、悶絶し眠ることのない3日間を過ごすのも少くはない。ホットミルクをもう一口口にすると、真雪は薬を飲んだ。

「ありがとうございます」

「気にするな」

神崎課長…好きになりそう……うつん…もう…好きだ。

元々、上司と部下としての信頼感をベースにした好意はあった。

好きになるものと予防線は引いていたが、景吾のさりげない優しさはいつも女心を刺激していた。

「スーツのままだと何だから、これにでも着てくれ」

そう言つと、景吾は買い物袋ごと真雪に渡して、部屋から出ていった。

渡された紙袋の中を見ると、見るからに暖かそうなクリーム色のモコモコの部屋着が一着。

タグは全て外されていたが、袋を閉じるシールが張ってあった。

わざわざ買ったのだろうか？

誰にでもこんなに優しいの？

真雪は泣きそうになるのを必死に堪えた。

薬が効いてきたのか、身体が少し楽になってきた。

真雪はふらつきながらも立ち上がると、シートを確認する。

よかった。横モレしてない。

これでシートが血塗れなら泣いちゃうよ。

昨夜会社を出る前に履き替えたショートタイプの手拭きを履き替える。

履いていたものは、くるくる丸めて、常備のサニタリーの袋に入れて鞆に入れる。

鞆からお泊りセットを取り出すと、拭くだけのメイク落としで顔を拭い、簡単なスキンケアをして、ナイトメイク様のパウダーを載せ、眉を整えると、サイドボードに置いたままの温くなったホットミルクを飲み干し、脱いだスーツとシャツは軽く畳んで部屋着が入っていた紙袋に入れ、ベッドに腰を下ろした。

「お礼…言わなきゃ…」

力が入らない身体は中々立ち上がってくれない。

真雪はそれでも気合いを入れて、立ち上がると、景吾が出入りしていたドアへ向かう。

「着替え、済んだようだな」

真雪からは頭しか見えなかったが、扉の開閉音に気が付いた景吾はソファから立ち上がる。

それから、ホッとした様子でソファに座る様に促した。

ソファー前のローテーブルにはノートパソコンと資料があり、仕事をしていたことが窺い知れる。

ソファーに真雪が座ると、景吾はキッチンカウンターの傍にある椅子へと腰を掛けた。

ソファーとキッチンカウンター前の椅子。

数mの距離感がそれなりの他人行儀さと親しさを証明している。木の柔らかさとグリーンが基調の部屋は落ち着いた空間になっている。

会社でのこの部屋の家主のイメージ的にはモノトーンの部屋だろうが、リラックスしてコーヒーを飲んでいる姿には相応しい。

「仕事に不備はありませんでしたか？」

「大丈夫だ。工藤さんは休み前に必ずきちんとしてくれているから、フォローはほぼしなくて済む」

軽く笑みを浮かべて、リラックスした上司が目の前に居て、ルームウェアを着た自分が寛いでいる。

まるで恋人だ。

手元には景吾が入れたコーヒーがあり、一口飲めばホツとする。

この妙に居心地がいい空間に真雪は戸惑っていた。

「工藤さん」

「はい」

「俺と付き合わないか？」

「へえ？」

名前を呼ばれ、顔を上げると、真摯な眼差しで真雪を見つめる景吾。次の瞬間に言われた言葉にぎょっとして真雪は景吾を見つめ返した。

「ど、どうして私なんです？」

言外にわざわざ、私を選ばなくてもいいじゃないかと告げる真雪が相も変わらず自分を範囲内に入れてはくれないことに内心ため息をつく。

「いつも頑張って仕事をしている。必ず休みを取る前にはしっかりと下準備をしていてくれ、誰にでも優しく、後輩を的確に導いている姿は人として尊敬に値する」

「その言葉、神崎課長にそっくりそのままお返しします。そして、付け加えさせて頂ければ、10人が10人かっこいいと言い、社内外問わずファンが居て、歴代の恋人は他社のOLの中でも美人だと言われている方達ばかりの神崎課長が、なんで私なんかを選ぶんですか。…こんな面倒な女…」

「その面倒さがいい。痛みを我慢しているのを見ると甲斐甲斐しくしたい。頑張っているのを見ると、後ろから抱き締めたくなる。困っていたら助けてい。…まだまだある。工藤さんが気になって仕方ないんだ」

話している間に神崎が真雪が座るソファの脇まで来て、ソファのひじ掛けに座る。

その様子を見ながら、真雪は人一人分神崎から離れて距離をとる。まだ距離をとるのかと景吾の心が揺れた。

自分のルックスは知っているし、女は常に自分の周りに居た。

男女問わずに憧憬思慕の眼差しが常に自分を取り巻いていた。

そんな中、工藤真雪だけがただの上司として見ていた。

それに気が付くと真雪が気になるようになった。

「工藤さん。人間、惚れたのなんのは些細なきっかけなんだ。俺の場合は君の苦痛を我慢して、迷惑をかけまいとする姿に支えたいと思わせられた。しかし、君はとことん距離を上司と部下にしかさせないからね」

言った直後、神崎は距離を詰め、逃すものかと言わんばかりに真雪の隣に座る。

しかし、

真雪は拳1つ分だけ離れる。

「…今までお付き合いした相手に振られてきた原因が生理なんです。皆、最初は痛そうな様子に心配そうだけど、男の人はなんというか自分の無力感に弱いと言うか…必ず月に1回はあることに面倒になってしまふというか………だから、私は諦めることにしたんです。期待しないことにしたんです。閉経するまでの辛抱だって…決意したのです。だから、もう男性とはお付き合いしないことにしたんです」

膝をぎゅっと握り、経験からの断りを告げる。

「痛みを変わることはできない無力感に、年に最低でも3日かける

12カ月の36日は苦しんでいることになる。

そんな姿を支えることさえ出来ずに居るのは、一般的な男は…ダメだろうな。でも月経自体は女性ならついて回るものだからね。

君を部下にしてから、月経について調べて他の男よりは詳しいと思う。君が俺に全くの好意を抱いていないのなら振られても仕方ないと言っか、それ以外の特に身体に関することで断ることは許さない」

爪を膝に立て、俯く姿に景吾はこれだけ言っても真雪の心は溶かすことは出来ないのかと諦め半分になる。

一方、真雪はこれまで別れの原因になってきたものが始まりを作ったことに驚いていた。

「…神崎課長…」

薄ら涙を浮かべて、景吾を見つめる真雪。

やっぱり、神崎課長は優しいですと、真雪は笑う。

「悪いけど、俺は誰にでも優しいわけではないんだ。そうだなあ。志村さん辺りに聞いてごらん。工藤さんには特別に優しいと言うはずだよ」

真雪を壊れ物の様にそっと包み込んで、髪を手櫛で梳きながら、額に口付けた。

「もう一度言うよ。君の身体のこと熟知している上で、君が好きになったんだ。俺と付き合ってくれるね」

未だ不安な様子の真雪を強めに抱き締めた。

「…愛想尽かさないですか？」

今後、景吾に愛想を尽かされたなら、2度と恋愛などできないだろう。

今後こそ最後の恋だと信じていいのだろうか。

真雪は景吾の腕の中で景吾を見上げる。

「もちろん。君に一生尽くそう。真雪…好きだ」

「ありがとうございます。私も課長が…課長が好きです」

景吾の優しさはどんなに押さえていても、恋心を肥大させる。
好きになってはいけないと思えば思うほど、禁忌に惹かれていくものだ。

結局、景吾を好きになってしまっていた。

「真雪、今日も泊まっていてくれるか？」

膝の上で脱力して景吾に寄りかかっている真雪の髪の毛先をくるくると指先で遊びながら景吾が問う。

不可抗力に一晩泊まっているとしても、真雪としてはシャワーも替えの下着も持ってきていない、しかも生理中のこの状況でもう一晩となると、ちよつと戸惑ってしまう。

「それはちよつと…」

景吾から離れて話そうとするも、かつちりと肩を抱かれ、もう片方の手は腰を擦っている。

男性の大きく暖かな手は凝り固まった腰を和らげ、脱力感を誘う。

「今日の様子を見てみると、帰したくない。いつも1人で苦しんでいるかと思うと抱き締めたくなる」

「へ？」

ぎゅっと抱き締めると、真雪を自分の隣に横たえ、ブランケットをかけると、さっさと膝枕をする。

あつという間の出来事に真雪が口を挟む余地はなく、されるがままになっていると、真雪の上に景吾の優しい眼差しが降った。

髪を梳くのはこの人のクセだろうか？キモチイイな…

頭をゆっくり撫でながら、書類を読み始めた景吾にすっかり毒気が抜けた真雪はやがて静かに眠りに落ちた。

1週間後。

「おはようございます。神崎課長」

「おはよう。工藤さん」

職場フロアに昇るエレベーターに真雪が乗り、振り向くと景吾が居た。

2人を乗せたエレベーターは上昇を始める。

「今日は何がいい？」

真顔での問いにこの1週間を振り替える真雪。

「昨夜はイタリアンだったので、今日は和食でしょうか…」

「畏まりました」

フツと笑う景吾。

生理中はそれこそ甲斐甲斐しく、真綿に包まれたように甘やかされ、真雪はくすぐったい程だった。

会社に居る時にはbitterなのに、2人で居るときはsweet…いや極甘かな。

「神崎課長…甘やかし過ぎですよ」

「馬鹿言え、まだまだ甘やかしたりないぐらいだ」

フロアに着けば、上司と部下。

何知らぬ顔で出社したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1875q/>

スイート ダーリン

2011年9月12日20時02分発行